

7 日本の国籍を守って

語り手：村田 日出子／聞き書き：資料収集調査員 松村 雅子



日出子近影

村田日出子の略歴

- 昭和 8 (1933)年 京都市伏見区に村田家の長女として生まれる。
- 昭和 16 (1941)年 京都府宇治市の大久保小学校に入学
- 昭和 18 (1943)年 兄と 2 人で初めて汽車で佐賀に住む伯父を訪ねる。
- 昭和 19 (1944)年 父と兄 3 人で満洲に渡る
- 昭和 26 (1951)年 18 歳年上の王と結婚
- 昭和 36 (1961)年 娘 2 人連れて再婚
- 昭和 49 (1974)年 叔父より初めて手紙が届く
- 昭和 51 (1976)年 息子 2 人連れて一時帰国 【用語集→】
- 昭和 52 (1977)年 叔父が中国を訪ねる
- 平成 6 (1994)年 永住帰国 【用語集→】

生い立ち

南には奈良、北には京都、悠々と流れる宇治川、^{うじがわ}連綿と続く茶畑。昭和初期の風光明媚な宇治市大久保の一里山、^{しんめいちよう}神明町に村田一家が住んでいた。日本レイヨンに勤める父村田忠二と伏見で生まれ育った母シズの家族に長男康（やすし）、長女日出子（ひでこ）、次男耕（ただし）三男巖（いわお）、渡満直前に生まれた次女恵子（けいこ）がいた。長女の日出子は昭和8年10月15日伏見の病院で生まれた（その頃家族は伏見に住んでいた）。平穏な大家族は満洲に渡り、再びこの郷に戻れたのは日出子だけであった。

おいしかったスイカ

私は4歳の頃にお父さんが会社に通いやすいよう大久保に引っ越してきました。伏見の自宅を売って、2階建ての家を借りました。隣は佐藤さんという人が住んでいて、裏は広い茶畑、茶畑の向こうに小さな川がありました。あの頃は水道もなく、佐藤さんと1つの井戸を使っていました。冷蔵庫ありませんでした。一番暑い時に扇風機があつたぐらい。夏に外から帰ってきたら、お母さんは井戸の底で胡瓜やトマト、良い時にはスイカを冷やしてくれました。冷たくておいしい、今のスイカや胡瓜の味と違う、全然違いますね。とても美味しいの。親の元で一番幸せでした、あの頃は…。

日出子は心の底に眠っていた記憶を辿り、優しく微笑んで地名や人名は日本語でそ

の他は中国語で話してくれた。和んだ顔で昔話を話しているようだった。

幸せな日々

私のお父さんは声が良くて、歌がとても上手い。お父さんが歌った「戦友」は今も覚えています。私は歌うのが上手くないが、聞くのは大好きです。お父さんは出かけるのも好きで、休みの日には私たち兄弟や近所の子も連れて、京都や大阪に遊びに行きました。JR 奈良線は昔、奈良電鉄と呼んでいました。汽車に乗って出かけました。お正月は桃山御陵^{ももやまごりょう}に初詣に連れて行ってくれたこともありました。また1度だけど…お正月にはみかんを食べたり、おもちを食べたり、羽根つきしたことを覚えています。

「春の小川は　さらさら行くよ　岸のすみれや　れんげの花に　姿やさしく、色美しく、咲
けよ咲けよと　ささやきながら」

めだかやおたまじゃくし、川にはいっぱい泳いでいた。笹の葉で船を折って、川に浮かして遊びました。小さい時は本当にこの歌のようで…すべてが楽しかった…。

小学校の思い出

父親の忠二は堅実に働き、会社で部下を抱える役職者に出世していった。母親は家事と育児に励み、田村家の4人の子どもたちはすくすくと育った。忠二は子供の勉強を見たり、時間を見つけては遠くに子供達を連れて遊びに出かけた。8歳になった日

出子は兄の通う大久保小学校に入学した。

昔の学校は、先生は厳しくてね、机をばしっと叩いてしかると皆は体がこわばって、びくびくしていました。こわかったで一。でも、子供同士は、今みたいなじめもなく、皆仲良しでした。よく遊んだ丸山洋子、小西みちよ、長野ひろこ、あとは…はっちゃん、彼女の名前は…そうだ、植田はつこだ。学校から帰って一緒に歌いながらボール遊びして、歌って遊びもしました。こう歌うの。

「夏も近づく八十八夜、野にも山にも若葉がしげる。あれに見えるは茶摘じゃないか。赤ねだすきにすげのかさ」

小さい時に覚えた歌は忘れないね ははは…。

昔は給食はなかった、毎日お弁当を食べていました。一番多かったのは「日の丸弁当」でした。今の人は知らないよね。「日の丸弁当」っていうのは白いご飯の真ん中に梅干し1個。はは。沢庵や焼き魚があったらいい方でした。でも、皆は皆同じじゃないよ、お金持ちの家の子のお弁当はそれは中身はすごかったよ。運動会や遠足の時だけ、お母さんはご馳走を作ってくれました。おいしいお弁当を持って奈良公園に行きました。遠い琵琶湖にも行ったことがありました。奈良には鹿がいました。昔からいたね。あれは。

兄妹の2人旅

日出子の父、忠二は村田家の兄弟3人の真ん中で、日出子の伯父さん一家は事情により佐賀に移り住み、叔父さん一家は長岡京^{ながおかきょう}市に住んでいた。伯父さんの息子2人は京都で下宿して大学に通っていた。夏休み、佐賀の家に帰る時に日出子と日出子の兄2人は同行することになった。それは旅行好きなお父さんが勧めたことに違いなかった。日出子にとって忘れられない初めての遠出だった。白い波を打つ碧い海、フェニックスやパームツリーの街路樹が青々と茂り、一年中花や緑が絶えることのない南国、小学校3年生の日出子にとってはまさに楽園のようだった。

甦った1枚の写真

話していた日出子が立ち上がり、奥の部屋から1枚の白黒写真を取り出してくれた。

みて、この写真、あの時に写した写真、椰子の木の下で後ろに立ってるのが従兄弟2人で、前で私の隣にしゃがんでいるのがお兄さん。私たちの後ろの木の向こうに海、あんなきれいな海を見たのは初めて。この写真は、実は最近、私のことを知った知人が、当時現像を頼んだ写真家さんを訪ねて、現像してくれました。もう60年になるかな……そんな昔の写真のネガを見つけて…懐かしい…こんな写真を見れるなんて…。

満洲へ行く

戦争の色が濃くなり、普段の生活にも影響が及んできた。食べ盛りの子供が4人もいる村田家の食卓も日に日に厳しくなっていた。

ご飯はいつも盛り切りでした。盛り切りという言葉は今の人には分からないよね。お茶碗にあるだけ、お代わりがないということ。大根や大豆入りのご飯もしょっちゅう食べるようになりました。その時に、お父さんから、満洲へ行けばお腹いっぱい食べれると聞かされました。お母さんは泣いて、嫌がりました。その頃、お母さんは5人目の子を妊娠していました。何も知らないところでお産はできないと思ったでしょうね、お母さんの実家は皆反対でした。

お父さんは長くレイヨン会社で勤めて、もうその時は部下もいるえらい人でした。会社の満洲開拓の呼びかけに応じて、日本を発った人もいて、お父さんもそれに負い目を感じて、満洲に行こうや行こうやと…家をつっぱっていました。そんな行くか行かないと埒が明かない時にあることが起きました。お父さんがいない時に、部下2人が喧嘩をして、殴り合いになり、偶然に1人が怪我して死んでしまいました。上司ということで、お父さんは警察に連れて行かれました。取り調べを受けにね。これはお父さんにとっては耐えられない事でした。もう会社にいる面目がない、絶対満洲に行くとその時に腹をきめました。お父さんは家族を置いて徴兵されるより、家族と一緒に満洲に渡り開拓に行った方がましだとも思ったらしい…。

満洲に向う

満洲行きの意を決めた忠二は妊娠中の妻のことを気遣い、昭和19年の1月頃に14歳の長男と11歳の日出子を連れて先に出発することにした。満洲で永住する覚悟で村田家にある衣類や生地、持って行けるようなものを全部荷物に纏めた。町内の人々が、日の丸の旗を手に、歌いながら駅に見送りに集まった。忠二親子3人は汽車で下関港^{せき}に着き、そこから全国から集まった開拓志望者たちと船に乗り、朝鮮半島^{ちょうせんはんとう}に渡った。その後は、トラックで中国に向かい、吉林省敦化県の廟嶺開拓団^{きつりん とんか びょうれい} 【用器集→満蒙開拓団】に入植^{【用器集→】}した。

小学校4年の時でした。絶対満洲に行くというお父さん、いやいやで満洲行きの準備をするお母さんをみて、私は自分の気持ちはどうのこうのと何も考えられませんでした。お父さんに従うしかありませんでした。お腹が少し大きくなったお母さんに見送られ、沢山の荷物を持って出発しました。いつもの駅には町内の人たちが集まり、歌ってくれました。何という歌だったか思い出せませんが、いい歌だったな覚えています。会社でのいざござが起きなかつたら、お父さんは満洲に開拓に行こうとしたのかな…。

入植

村田家が配属されたのは、吉林省の郊外の廟嶺開拓団だった。中国人の村に点々と4～5軒開拓家族が住んでいた。中国人の家族を追い出した空家が村田家に割り当てられた。寒い東北地方特有の杭（オンドル^{【用器集→】}）つきの家だった。周りにお店や市

場もなく、病院、薬局何もない所だった。あるのは無限の未開拓の土地だけだった。

着いてみたら、本当に何もない所でした。土地も固くて瘠せていました。買い物ができへんのが一番困りました。馴れないことばかりでした。聞いた話とは全然違う、どうやって暮らしていいか分からなかった。

家族が満洲で揃った

一方宇治では、母が女の子を生んだ。恵まれるようにと恵子という名前をつけた。満洲に着いた父は、日出子兄妹を開拓団に置いて、日本に日出子の母を迎えに行った。往復1ヶ月が掛かった。昭和19年の夏、村田家が全員揃った。終戦の1年前のことだった。

両親と私たち兄弟5人の家族が、半年、離れ離れの生活をして、漸く一緒になりました。でも、満洲に着いたばかりのお母さんは毎日泣いていました。店がなくて、生活に必要な物を買うこともできませんでした。日本から持ってきた服、物を野菜や日用品に交換しました。物々交換よ、それ以外にどうしようもありませんでした。お米だけは開拓団から配給があったようで…毎日白いご飯を食べれたけどね…。そこの水はね、水が硬いというか、全然身体に合わなかった。家族皆、お腹を壊しました。お医者さんもないし、薬屋さんもないし、日本から持ってきた薬が段々なくなりました。私とお兄さんが先に満洲に行ったから、薬もほかの兄妹よりたくさん飲んだお陰か、お腹の調子は落ち着きました。皆が可哀相でした。

赤ちゃんの死

生活環境に慣れない、お水に慣れない、お母さんはお乳もでなくて、妹の恵子は半年もしないで死んでしまいました。両親が子供の名にこめた願いが叶わず、何も恵まれない中、恵子は生まれて、たった半年で逝ってしまいました。山の麓に開拓団の子供たちのお墓がたくさんありました。皆もこの水に合わなかったのだと思う。だんだん増えていくお墓を見て、ただ悲しかった。

お父さんの不運

会社に、国に、世間に対して、精一杯の責任を果たそうと、自分の人生をやり直そうと心に決めて満洲開拓の道を選んだ忠二にとっては、この過酷な環境は予想外だった。それより自分の家族が住むために、中国人を家から追い出したことを辛く思っていた。だが、ためらう余裕もなく、荒れた土地を耕さなければ生きる道がなかった。朝から晩まで慣れない農作業に取り組み、トウモロコシを作った。ある日、作業中に棘が目当たり、運悪く目玉に刺さり、大変なことになった。病院もない田舎では医術が分かる者も居なかったので、仕方なく忠二は1人で治療の為に日本に戻った。再び廟領開拓団に戻った時はもう右目は偽眼になっていた。

お父さんは優しい人でしたから、自分が結果的に中国人を追い出して、その人の家に住み、生活しているので、よくその家の持ち主のことを考えて、可哀相なことをしたなど呟いていました。お父さんはずっと工場勤めの人で、農作業は全然知らなくて、慣れなくて、毎日は

それは大変でした。でも、お父さんは自分で決めたことだから、何も言わず一生懸命に働きました。そんなところで片目をなくしてしまって…治療の為に、日本に1人でつらい旅をしました。2ヶ月ぐらい掛かりました。

開拓団の冬

10月に入ると満洲は段々寒くなっていった。それは日本で経験したことのない厳しい寒さだった。開拓団の方から軍用綿入れの服上下、帽子、手袋を1人一式配給された。子供も女性も皆「軍人」さんの格好になった。土地まで凍ってしまう寒さの中、開拓も中止せざる得なかった。川は薄く凍りつき、2つの河を渡り、開拓団小学校に通う子どもたちは休学になった。

私は向こうに着いてから、最初は体調が悪かったけれど、だんだん慣れて、薬も効いてきたと思うけど、元気になって、開拓団の小学校に通いました。近くに住む開拓団の子供たちも一緒に50~60人の学校でした。教室は2つに分かれて、2人の先生が教えてくれました。年齢で大まかに2つに分けられただけでした。だって教室2つしかありませんでしたから。

年齢も学年も関係なく一緒に勉強しました。学校が遠くて、2つの河を渡らないと着かない場所にありました。もちろん、その河には橋がありませんでした。それは大変でしたよ。行きも帰りも河を2回渡るんですよ。10月に入ると、河の水が薄く凍ってしまい、河を渡れるのが無理だったから、仕方なく学校も休校になりました。学校に通えたのはどれぐらいだったかな…？ ほんのわずかの間だったなあ。その時使っていた教科書は日本から持て来たも

のでした。

逃避行

昭和 20 年の夏にソ連が満洲を襲撃し、日本は敗戦国になった。満洲国でいままで優越感を持っていた日本人たちがソ連軍と一部中国民衆たちの標的になった。その中で各地の開拓民たちは開拓地を離れ、命掛けの帰国の道を辿った。まず、港に繋がる鉄道駅のある町を目指す逃避行が始まった。

「日本が負けた、戦争に負けた」と言って、たくさんの開拓団の人たちが私たちの住む村に逃げてきました。それは昭和 20 年の夏頃、それで初めて日本が負けたと知りました。突然でねー、とにかく急いで荷物をまとめ、ほかの開拓民と一緒に村を離れ、逃げました。雨の日も嵐の日も皆で歩きました。ひたすら歩きました。ソ連軍や中国人がどこから襲ってくるかわかりませんからね。夜になって山道を選んで歩きました。ばれたら皆危ないし、泣き出した赤ちゃんの首を絞めた人もいました。明日命はあるかどうか分からない毎日でした。どれくらい歩いたのか、吉林市につきました。途中で疲れ果てて、一番下の弟巖が亡くなりました。大きな穴を掘り、亡くなった 10 人くらいの子供と一緒に埋めました。吉林市内にはソ連兵が居ました。あっちこっちに見かけました。お母さんや女の人たちは皆髪を剃り、丸坊主にして、顔を黒く塗り襲われないようにしました。髪の毛の長い人を見つけたら、そうすぐに連れて行きましたね…怖かった…

運命の分岐点

吉林市に集まった開拓民たちは、そこからは、満洲国の首都であった新^{しんきょう}京と炭^{ぶじゅん}鉱の町撫順に進路が分かれた。撫順は炭鉱の町で仕事を見つけやすいと考えた村田家は撫順に向うことにした。汽車も電車もなく、毎日歩いた。川には橋もなく皆で支えあって渡らなければならなかった。

皆に付いていけなかったら、もう生きる道がないと、必死で歩きました。お腹が空いたら、じゃが芋やら高粱やらトウモロコシの畑で生のままでかじりました。食べられるものなら食べました…。途中では中国人に追いかけられ、衣類やお金など荷物を全部奪われました…。着の身着のままでした…。疲れきったお母さん（39歳）が倒れました。たくさんの人も倒れて亡くなりました…。お母さんはただ疲れて意識不明なのか、もうだめだったのかじっくり確かめることもできない、埋めることもできない、置いていきました…。もう、どうしようもなかった…。そのことで、私はずっと悔やんでいました。もしかしたら、その時にお母さんはまだ息をしていたのかもしれない…。そう考えると胸が痛みます。

たどり着いた一撫順

撫順に向う茨に満ちた長い道のりに開拓民たちは多くの家族を途中に残して、撫順に辿りついた。生死に係わるこの逃避行は真夏から始まったが、撫順に着いた頃はもう真冬だった。北国の満洲の寒さは並大抵のものではない。ナイフで肌を削るような痛みを伴うものだった。

11月ごろに撫順に着いた。お父さんとお兄さん、皆もう疲れてボロボロでした。お母さんや弟たちをなくして、家族が3人になってしまいました。悲しむ余裕もなく、今日1日どう生きるか大変でした。私たちは、撫順永安台^{えいあんたい}難民所に入れてもらいました。何もない所で、毎日少しのお米が配給されました。釜がなくて、兵隊さんが使ってた兜をお鍋にして、レンガを拾って、かまどを作り、それでご飯を炊きました。でも、全然足りなくて…。毎日特に寒くて、寒くて…荷物が奪われて、着るものも何も残ってませんでした。

父兄の死

満洲で開拓の道を選んだ父はどんなことがあっても残りの家族を日本に連れて帰りたかった。しかし、ついに大黒柱の父、逞しい兄も不運に遭い、とうとう大家族であったの村田家は日出子1人になった。

生き残りの私たち3人は生きて日本に帰りたい。食べ物や着るものをもっと手に入れるために、お父さんが仕事を探しにいくと言って、出掛けました。夕方暗くなっても帰ってきませんから、お兄さんと探しに行きました。難民所からすぐのところに人だかりができていて、中に入ってみると父が頭から血を流して倒れていました。私は泣きながら「お父さん、お父さん」と叫びました。

日出子はここまで涙を堪えて話すと、体もガタガタと震えだして、右手で左の腕をギュット掴み、力いっぱい揉んで、自分の悲しみを抑えようとしていた。日出子は、

顔を伏せて、肩も手も足も心臓を中心に縮むようにして、丸くなり、悲しさに潰されないよう耐えていた。どれぐらい時間が経ったのか、少しずつ日出子は顔を上げ、呼吸を落ち着かせて、また話し出した。

この話をするのは本当に悲しい…思い出すのもつらいわ…。私が走って行った時に、大きな銃を担いたソ連の兵隊さんは、何やらロシア語を喋って去って行ったのが見えました。目の前の血だらけのお父さんが弱々しく話してくれました。日本人女性がソ連兵に連れて行かれる所を、お父さんが止めようとしてしました。ソ連の兵隊さんに銃で殴られました。日本に2人の叔父さんがいる、お前たち2人で早く日本に帰りなさいと言って、お父さんは息を引き取りました。私も兄ちゃんもわんわん泣きました。大きな穴を掘って、雪でお父さんを埋めました。それ以外何もして上げられませんでした。あまりにも悲しくて…もう一緒に死にたい、死んだ方が楽やな…とそればかり考えました。

でもね、ものを食べないとお腹が空くし、夜になると寒く感じるし、私も兄ちゃんも生きているんだからね。お父さんが最後に言った「生きて日本に帰らねば…」。今度は、兄ちゃんが友達と仕事を探しに行きました。西にある露天鉱で掘った炭を袋詰めし、運搬する仕事を見つけました。けどね…長く続きませんでした。細く痩せた兄ちゃんは、空腹で力がなくて、大きな炭袋と一緒にふらふらと炭坑に滑り落ちました。足が骨折の大怪我でした。段々と寒くなってきて、食べ物もなくて、薬もなくて、兄ちゃんが可哀相でした。痛くて寒くて…。私は収容所の壁の木板を剥がして、それを燃やしてレンガを暖め、それを布で包んで兄ちゃんを暖めて上げました。壁が堅くて、私の力のない細い手で必死に剥がしました。でも、兄ちゃんがまた寒いと言った…私にできることは何もありませんでした。10日ぐらいして、兄

ちゃんも死にました。「日出子、かんにんや」と言って。「お兄ちゃん死んだらあかん、お兄ちゃんが死んだら私はどうするの」。

1人ぼっちの日出子

当時の難民収容所^{【用語集→】}で栄養失調や伝染病と厳寒で避難民たちはバタバタと倒れ亡くなっていった。日出子は1人ぼっちになった。

お兄ちゃんが死んで、私はどうすることもできない、意識がなくなるまで泣きました。もう生きているのか、死んでいるのか自分もよく分らなかった。難民収容所の部屋には死んだ人ばかりでした。周りに布団やら毛布が散乱して、私はそのごちゃごちゃした布団の中で昏睡していました。うすらうすらと中国人らしい人が部屋に入ってきたのが分かりました。「この女の子はまだ生きてる…」と言って、私を抱き上げ、日本人のいる部屋に連れて行きました。西村さんという女の人が私を引き受けました。ある日、西村さんは町をぶらぶらして来ようと私を連れ出しました。そして、ある中年の中国人に会わせました。後になって知りましたが、西村さんがその中国人からお金を受け取り、私は売られていました。

養父母の元で

生きて日本に帰れとの父の最期の言葉を日出子は心に刻んで、まず生きることが一番大事と思っていた。戦乱の中、満洲に残された日本人たちは生きるために、同胞を売るようなことも有った。どうしようもない現実だった。

日出子の養父となったのは冠印山^{かんいんさん}という人で、当時45才、炭鉱で働いていた。冠家は10歳年下の奥さんと17歳ぐらいの長男の3人家族だった。奥さんは気が強くてマージャンなど賭け事の好きな人だった。

初めて冠家に行った時、私は14歳、言葉も通じませんでした。4人がオンドルで並んで寝ていました。最初布団が3人分しかなく、そこのお兄さんが掛け布団を私に譲って、自分がコートみたいなもので寝ました。敷布団もなく、堅くて…とにかく中国式の生活に慣れなくて、どうやって生きていくのか分からなかった。養父は優しい人だった。お兄ちゃんも私のことを「小姑娘（シャオグーニャン：小娘の意味）」と呼んでいた。そして、私に冠春玲^{かんしゅんれい}という名前をつけてくれた。

収容所に居た頃、凍傷で右脚の5本の指をなくした。腫れて痛くてね、養母が漢方の処方はどこからか聞いてくれた。田舎の親戚に頼んで、雀の脳を取ってもらって、私の足に塗った。それで効くという。医者も薬もなかったし、それが効いても、もう5本の指はなかった。それが養母の恩を感じる唯一の思い出かな…それ以外はきついことばかりだったわ。

着替える服も用意してくれない。ずっと同じ服を着て、毎日豚のえさを集めに行き、草刈り、水汲み、家事も沢山仕事をしなければ、ご飯も食べさせてもらえない。やっとの食事も茶碗の半分しかくれなかった。豚のえさを食べたりもしたわ。養母は、私を金で買ったからと言っていました。養母は昼間にいつもマージャンシに行く。私は家のこと、畑の仕事を全部任されて、誰も居ない畑でお父さんやお母さんのことを思い出し、よく泣きました。日本の歌を歌って、「早く日本に帰りたい…」と思いました。

学校に行きたい

近所の子が皆学校に行くのを見て、日出子も行きたいと養父母に頼んだが、金が掛かるから許されなかった。冠家のお兄さんは日出子に中国語を習う本を見せてくれた。近所の子に教わり、地面に釘で字を書き、覚えた。「小人児書」（中国風漫画）を読んだ字を覚えた。同時に日本語も忘れてくなかった。

畑でいつも一人で歌いました。大久保小学校で歌った「朧月夜」。 — 菜の花畑に 入日薄
れ 見わたす山の端 霞ふかし 春風そよふく 空を見れば 夕月かかりて におい淡し
里わの火影も 森の色も 田中の小路を たどる人も 蛙のなくねも かねの音も さなが
ら震める 朧月夜 — 唄って泣いて、また歌いました。日本よ、早く私を見つけて、故郷
に連れ行き、学校に通いたい。日本語を絶対忘れないように…いつか必ず日本に帰ります。
後に、公安局 明瞭機 から国籍のことで呼び出しがあり、私は、日本籍のままでいいときっぱ
り答えました。日本籍でいるといつかお国が私のことを見つけてくれると思った。

文通

冠家で4年ほど暮らして、18歳になった日出子は養父母の勧めで18歳年上の王^{おう}と結婚した。間もなく娘2人が生まれた。幸せや不幸など気にする余裕もなく、生活と子育てに暮れる日々だった。器用な日出子は中国語も段々話せるようになり、歌も数回を聞くとすぐ歌えた。裁縫や中国の家庭料理、肉まんなども得意になった。周りに

は日本人は1人も居なかった。話さないと日本語まで忘れると日出子は内心で焦っていた。夜になると月を眺めて、涙が溢れ、帰れるだろうか、心の中でまた「朧月夜」を歌った。

故郷に帰りたいけど、どうしたいいいかまったく分からず途方に暮れた時期に、
趙秀玲ちょうしゅうれいと出会った。

趙さんは瀋陽しんやうから下放されてきた人で、お母さんは日本人で、もう日本に帰ったと言うので、私は嬉しかった。日本に帰れる…それで趙さんのお母さん宛に、佐賀と長岡京市に住んでいるはずのお叔父さんを探して欲しいと手紙を書きました。そしたら、山本さん、あのお坊さんの…そう…山本慈昭やまもとじしやうさんが動いてくれました。佐賀の伯父さんを見つけられました。1974年かな…初めて伯父さんの手紙を受け取りました。「ひでちゃん、生きてるの？よう生きてるな。ひでちゃん、びっくりしたよ」私はその手紙を手にして、1日中泣きました。私も日本語の本を見ながら、頑張って日本語で返信を出しました。

「伯父さん、私の手紙分かりますか？私の日本語分かりますか？」「よく分かります。よく覚えてるな…ひでちゃん、偉い」

佐賀の伯父さんとの文通が始まった。それから長岡京市の叔父さんとも連絡が取れた。

一時帰国

日出子は28歳の時に夫が病気で亡くなった。娘2人を連れて再婚し、食料不足の撫順から農業中心の開原（2番目の夫の実家）に引っ越した。そこで長男と次男が生まれた。畑を耕し精一杯働き、それでもぎりぎりの生活だった。日出子は、故郷への想いが募るばかりだった。

1976年、山本慈昭さんとおじさんたちの働きで日出子の一時帰国が実現した。日出子44才の時だった。

私はずっと日本籍を守ってきた、だから、あんな田舎でもちょっと遠出するとね、地元の公安局に届けを出して、許可を貰わなければだめだった。一時帰国の時は、日本の厚生省【用紙集】が特別手続きのようなものをしてくれた。

付き添いの田舎の公安もとても協力的だった。一緒に汽車に乗って北京空港^{ペキンクウコウ}まで来た。私は、44歳の時で、10歳前後の長男と次男を連れて日本に帰ってきた。伊丹空港^{いたみくうこう}に着いたら、出口にはもう大勢の人が居た。長岡京市の職員や親戚たちが待っていた。30数年ぶりの祖国、夢に見た故郷、それは嬉しかった！「ひでちゃんよく帰ってきた」、叔父さんが涙ながら私を迎えてくれた。それから叔父さんね、私の覚えていた大阪・京都のいろいろな場所に連れて行ってくれた。叔父さんは優しい人だった。市役所の人もしょっちゅう訪ねてきて、言葉通じるか、通訳必要かどうか、生活に慣れるかどうかと本当に親切だった。私はその時は簡単な会話はできたし、生活をしてるうちに段々思い出したし、そんなに困ることはなかった。あのまま日本に残っていたら…あのまま中国に戻らなかったら…全然違っていた。

長岡京の叔父夫婦は一時帰国の日出子親子たちを引き受け、生活全般の面倒を見た。伯父のいる佐賀にも行かせてくれた。奈良電鉄しか知らない日出子は新幹線しんかんせんに初めて乗った。幼い時に兄と一緒に行ってから、数十年の歳月が流れていた。佐賀で日出子は衝撃的なものを目にした。自分の位牌が伯父の家にあった。伯父は、敗戦後に市役所から皆死んだと聞かされていた。伯父は、日出子たちの葬式もしたそうだ。中国でどんな辛い時も祖国のことを思い出し、気丈に生きてきた日出子には信じられないことであった。長岡の叔父は日出子と連絡が取れ、一時帰国の手続きをした際に日出子の戸籍を取得してくれた。7人家族が渡満し、九死一生で唯1人帰国できた日出子には感懐深いものだった。

5人の娘がいる叔父は本当に優しくいい人でした。年を取って、叔母さんは私たちを引き受けるのが反対だったので、そんな叔父のことを考えて、私は一端中国に戻ることにしました。市役所や政府からも永住帰国のような話も聞きませんでした。私は日本人だから、日本人ということも認めてくれたし、日本に帰ろうと思えば、いつでも大丈夫だとその時思いました。半年ほどお世話になった叔父たちと別れて、中国に帰りました。それから再び日本に戻るのに18年も掛かるとは思いもよりませんでした。

身元保証人

日出子は中国に帰り、家族と相談した。夫は帰国することに対して理解してくれた。子どもも一時帰国で日本のことを知っていたから、全員の賛同の元ですぐ日本に帰国

する手続きを始めた。しかし、当時は帰国するには、親戚の身元保証人^{【用職集-1】}が必要だった。日本で生活する上で親戚の同意と生活全般をサポートをできる保証人が居ないと帰国できないということだった。日出子は叔父に何度も保証人依頼の手紙を書いた。日本の厚生省にも手紙を送った。しかし、叔母の反対もあり、年を老いた叔父には応じてもらえなかった。

私は日本人なのに、どうして自分の国に帰れないのでしょうか？叔父さんの状況も私はよく分かっているし、責めるのも叔父さんが可哀相で、帰国手続きが全然進まないというより光も見えなくなり、それでも私は諦めきれませんでした。自分の国に帰れない、何かおかしいと思いました。ずっと後になって分かったことですが、1989年には、親族の同意がなくても特別身元引受人が居れば、帰国ができるようになりました。情報の届かない田舎に住んでいた私は、そんなことを知らずに、ひたすら叔父さんの了承を待ち続けました。1994年に日本政府の叔父さんへの働きかけもあり、漸く帰国に同意し、手続きを取ってくれました。本当に待ちこがれる帰国でした。

50年振りの帰国

日出子は11才で故郷を離れ、61才に漸く永住帰国を果たした。結婚した2人の娘を中国に残して夫と2人の息子を連れて4人の帰国だった。一時帰国から、実に18年も経っていた。

やっとの思いで日本に帰って来れました。大阪帰国者促進センターに入所をして、3ヶ月間

日本語と日本の生活を勉強しました。一時帰国から18年間、私は日本語をさらに忘れていました。毎日、言葉1つ1つを思い出してセンターの先生たちに話して確認をしました。先生たちからは”村田さんは京都の人だとすぐに分かるよ”と言われました。それはそうです。京都弁は私の身と心に刻まれています。どこで生きようと絶対忘れません。短い3ヶ月間で、私は毎日一生懸命に日本語を習いました。退所前に私の思いを日本語で作文を書きました。

日出子のこの時の作文の一部を紹介する。

私の故郷は京都です。昭和8年10月15日に京都の伏見に生まれました。4歳の時、父の会社の近くに引っ越しました。8歳の時、大久保小学校に入学しました。初めは久保田先生に教えてもらいました。

私の家は宇治の近くの里山神明町でした。家の前に茶畑がありました。横川には小さな小川もありました。その前に小さな山がありました。春になると山や野原にはスミレやたんぽぽやレンゲやいろいろの花が咲いていました。その時友達と一緒に花摘みに行ったり、笹の葉で小さな船を作って小川に流したり、山に登って桑のみを取ったりして、とても楽しかったのです。幼い頃の思い出は夢のように次から次へと思い出します。天理教に石階段が有って、友達とかくれんぼしたり、縄跳びしたり大変楽しかったのです。夏になるとお兄さんとお友達と蟬を取りに行きました。父は休みの日に京都の町に連れてもらいました。京都は有名で静かな町でした。清水寺きよみずでらや金閣寺きんかくじや三十三間堂さんじゅうさんげんどうや嵐山あらしやまへも行きました。あの時新幹線はありませんでした。車もあんまりなかったのです。

宇治での生活

日本語研修を終えた日出子一家は宇治市大久保団地に入居し新しい生活を始めた。懐かしい宇治川や大久保小学校はすぐ近くにある。小学校の同級生や兄の友達もまた多く地元に住んでいる。一度だけ日出子を囲んで同窓会も開かれ、当時のクラスメートと50年振りに再会した。懐かしい一時だった。中国で働き詰めだった日出子は、身体を壊していろいろ病気を持っていた。片言の日本語では、仕事に就くことも難しく、生活保護を受けて暮らすしかなかった。

私は帰ってきた…ほんまに宇治に帰ってきた…。ある日、お兄ちゃんの友達が宇治公園に連れて行ってくれました。宇治の茶畑は昔のままでした。宇治川も山も昔のままでした。何一つ変わらないままでした。それなのに、今は私が1人ぼっちになりました。昔の私の両親、兄妹たちはもうそばにいません。あの頃は、よく橋の上から、流れる宇治川と周りの山を眺めて1人で泣いていました。

今も大久保に住んでいるお兄ちゃんの友だちが私を訪ねてくれたり、小さい頃に一緒に遊んだ場所に行ってみたりもしました。私の小学校の同窓会にも呼ばれました。一緒に歌ってボール遊びした友だち何人かにも会いました。昔話いっぱいしました。同窓会の最後に「仰げば尊し」を歌いました。「あおげば尊し 我が師の恩 教えの庭にも はや幾年 思えばいと疾し この年月 今こそ別れめ いざさらば 互いに睦みし 日頃の恩 別るる後にも やよ忘るな 身を立て名をあげみよ励めよ 今こそ別れめ いざさらば 朝夕馴れにし 学びの窓 蛍のともしび つむ白雪 忘るる間ぞなき ゆく年月 今こそ別れめ いざさらば。」

小学校の卒業式で歌ったこの歌を、中国で1人でよく歌いました。学校に行きたくて行かせてもらえなかった頃にいつも学校のことを思い出し、この歌を思い出しました。だから、50年が過ぎた今も、この歌は忘れません。これを口ずさむと私の小学校の日々を思い出します。

日出子は歌いながら話してくれた。そして、奥の部屋の引き出しから1冊のノートを取り出した。日本に戻ってから、日本語の勉強も兼ねて、集めた歌詞だった。「戦^{せん}友^{ゆう}」「箱根八里^{はこねはちり}」「富士山^{ふじさん}の歌^{うた}」「蛍^{ほたる}の光^{ひかり}」「ふるさと」と日本の昔の歌やわらべ歌をたくさん書き込んでいる。ひらかなが多く使われていた。中には「花」「時の流れに身を任せ」という最近の曲もあった。歌が大好きな日出子は、歌に日本への思いや自分の気持ちを託し、生きる支えとしていた。

今の心境

日出子は念願の帰国を果たし、2人の娘家族と2人の息子家族も近所で暮らしている今どのように思っているだろうか。

そうですね、日本の景色もきれい、町もきれい、生活も私の思う以上に便利で本当に幸せです。生き抜いてふるさとに帰ってきて本当によかったと思います。今4人の子供とその家族も皆大久保に住んでいて、普段もよく遊びに来てくれます。休みになると皆集まって食事会をしたり、私の誕生日も祝ってくれます。子供たち、孫たちに囲まれて、にぎやかですよ。孫たちは、日本の学校に通って、どんどん大きく育っています。私は編み物も好きで帽子や

セーターなど編んであげます。彼らは学校でいじめに遭ってないか気になりますけど…。私の小さい時にいじめは全然なかったんですが、今は違いますね。

中国で生まれ育った子供たちは時に中国に行くことがありますが、私は1度も帰ったことがありません。特に帰りたい気持ちもありませんね。昔からずっとたくさん歌を歌いたかったし、絵を描きたかったんです。でも、今、頭も手も足も時々痛み、血圧も高いし漸く好きなことを考える余裕ができたというのに、悔しくなります。もう少し若いうちに、もう少し元気なうちに帰ってこれていたらなあ…。

中国での思い出はね、辛いことが多かったんですが、春になると山にたくさんの花が咲き、きれいでした。そこで山菜を採りながら、宇治のふるさとを思う時かな…中国で暮らした頃のある日、宇治の橋の夢を見ました。嬉しくて…目が突然覚めてしまい、「どうして目が覚めたのか、もっともっと見たかったのに」と1日落ち込んだことがありました。



聞き書きを終えて

2006年10月13日と10月27日、紹介を受けて、宇治大久保の団地に住む村田さんを訪ねました。実は私の実家は大久保駅の近くにあり、その辺りは私にとって十数年振りの懐かしい場所でした。駅のホールから遠くに見える山、大久保団地に向う下り坂は、昔と何も変わりません。

村田さんとは初対面でしたが、にこやかに暖かい中国の東北弁^{とうほくべん}で出迎えてくれました。何だか実家に帰った気分でした（実は私の父も残留孤児です。私も18歳まで中国の東北で暮らしていました）。2DKの部屋はきれいに整理されていて、ご主人との慎ましい暮らし振りが伺えました。おじゃました時にご主人も家に居ましたので、村田さんは、殆ど中国語で話してくれました。彼女の生粋な京都弁を聞くことができず、少し残念でした。

足の指をなくし、左右の足の大きさが違う村田さん、逃避行で家族も無くし、自分が日本人であることを強く心を持ちながら、保証人問題など乗り越え、約半世紀の時間を掛けて、漸く祖国に帰りました。波瀾の人生を振り返り、村田さんが誇らしげに「私は日本籍を守った」と伺いました。2日間合計8時間のインタビュー、辛い時に一緒に泣いたり、一緒に「茶摘」を歌ったりして、私は村田さんの日本人魂に深く震撼させられました。卒業式で村田さんが歌うはずの「仰げば尊し」という歌は、私は初めて聴きました。村田さんのストーリーと重ねて聞くこの歌は言葉で表現できない程切ないものでした。村田さんに辛い昔を思い出してもらい、申し訳ない気持ちや、聞き取りに協力して下さったことに深い感謝の気持ちが入り混じった2日間でした。

インタビューの途中で近所に住む村田さんの息子さんが、野菜や米を届けに来られました。素朴で気さくな方で、親子の会話から普段もよく訪ねてくることが伺えます。現在、娘さんや孫たちも皆近くに住んでいますので、日出子さんの誕生会や食事会でよく集まるそうです。昔、大変な苦労がありましたが、生まれ故郷で、是非、心穏やかに過ごして欲しいと私は切に願っています。村田さんの手書きの歌詞帳の中に「花」という最近の歌を見つけました。歌が大好きな村田さんにこの歌を元気に歌ってもらい、日々の中でささやかな幸せを掴んで欲しいと思います。

(まつむら まさこ)

基本データ

聞き取り日：2006年10月11日、11月11日

聞き取り場所：村田日出子さんのご自宅